

《研究ノート》

アジアにおけるキリスト論

—キリスト論ワークショップに出席して—

樋 口 恵

アジアにおけるキリスト論を検討する研究会が開催された。CCA(Christian Conference of Asia)によるキリスト論ワークショップ(Christology Workshop)であった。1984年11月15日から19日にかけて、タイのチェンマイでおこなわれ、約30名の出席者が参加した。オーストラリア、ニュージーランドを含む、インド、パキスタンから日本、韓国にいたるまでの11カ国のアジア、太平洋諸国の神学者達であった。5日間の研究会は、刺激に満ちたものであった。報告、討論を通して、主題の興味深さが参加者の関心をひき、議論は熱を帯び、全体を活気のあるものとした。反対に、参加者の関心が、主題の興味深さを引き出したのかもしれない。

この研究会の主題のキリスト論は、アジアにおけるキリスト論であった。アジア諸国における様々なキリスト論をひとつの場所へ集めて検討しようとしたのである。集大成としてのひとつのキリスト論をまとめあげ、提示するためではない。現在までなされてきたキリスト論の作業を整理し、将来の発展への一過程を提供しようとするものである。キリスト教神学の中心的課題であるキリスト論を通して、様々な視点から、アジアにおけるキリスト教が問われたことになる。これは、ひとつの試みであった。あらかじめ予想された筋書きは存在せず、研究会は、未知の領域を開拓していった。参加者は、共働者であった。

日本からの参加者の一人として、私は、この研究会に出席した。その報告を行ないたい。しかし、ここでは、単なる記録が記されるのではない。出席者の

1984年11月15日～19日に、タイのチェンマイで、CCA(Christian Conference of Asia)主催のキリスト論研究会(Christology Workshop)がおこなわれた。これはその報告である。

ひとりとしての私の経験を報告したい。このような報告が、この研究会の前提、経過を伝えるのに、もっとも適当であるからだ。この研究会の主旨をよく理解しうる助けとなると考えられるからだ。研究会にあらわれたキリスト論の課題をめぐって、ひとつの考察が、展開されるだろう。

I. 研究会の概観

1. 方法論の課題

イエス・キリストの人とわざとについての問題は、どこから起こってきたのか。アジアのキリスト者が、異なる信仰を持つ隣人と共に生き、働いているところの経験から起こってきたものである。この経験は、具体的な対話の経験である。キリスト論の考察の必要性は、アジアにおいては、従来の伝統的なキリスト論の概念が不適當になったという理由のみから起こったのではない。キリスト者が直面している、今までに経験したことのない新しい状況のためである。キリスト論は、キリスト者を隣人から離すのではない。新しい社会を求め、たたかいと新しい文化の探求において、両者をひとつにするものである。

2. 研究会の目的

(1)アジアの異なる国々ですでに行なわれている作業の情報を集め、具体的な討論の経験において、キリストに会いおうとするキリスト論の諸要素に焦点をあてる。

(2)問題を明らかにし、方法論を認める。キリスト者が、多元的な社会で教会の生活と証とを求めるときに必要な新しい方向を志向する。

(3)異なるアジアの国々で、この問題をさらに討論していくことを促すこと。これらの目的に沿って、以下の注意が認められなければならない。

①アジアの人々の経験そのものにおける多様性、すなわち、アジアの異なる国々、文化的背景、歴史的な経験と政治的構造における状況の多様性。

②キリスト者が、ヒンドゥー教徒、仏教徒、イスラム教徒や特定のイデオロギーの確信を持つ人々と出会う対話の経験そのものにおける相違。

3. キリスト論の領域と問い

(1)異なる宗教との対話の領域。

(2)正義のためのたたかいの領域。

(3)キリスト教の一般的な敬虔の領域。

これらの領域で、キリスト論の問題が問われる。

キリスト論の問いとは、いったいどのようなものであろうか。

「イエス・キリストは誰であるのか。」

「イエス・キリストをあなたは誰というのか。」

このキリスト論の問いは、アジアの教会の状況、キリスト者の生き方にとって、真に、実存的な問いである。このことが、もっとも重要な事柄である。この課題は、アジアのキリスト者にとって生きた課題である。論理的、神学的な議論の展開ではない。アジアのキリスト論は、抽象的な議論から解放されて、アジアのキリスト者と隣人を生かし、キリスト者の経験を組み入れるものとなるのである。

4. 研究会の構造

まず、諸宗教の存在するアジア諸国でのキリスト者の経験とキリスト論についての課題。

(1)証

(a)イスラム教徒のなかで、キリストを告白すること—ジョン・マリク (パキスタン)

(b)仏教徒のなかで、キリストを告白すること—マイケル・ロドリゴ (スリランカ)、八木誠一 (日本)

(c)ヒन्दウー教徒のなかで、キリストを告白すること—ウエスレイ・アリラジャ (WCC, パキスタン)

(2)イエス・キリストと民衆—安炳茂 (韓国)

(3)イエス・キリストと一般的なキリスト教の敬虔—サルパドール・マルティネツ (フィリピン)

(4)アディバズィ神学—新しい方法論へ向けて—フランシス・X・'Dsa (インド)

報告の後に、グループが編成され、グループの課題に沿って討論がなされた。課題とは、次のものである。

(1)キリスト論の^{メタファー}隠喩の多元性と世界の多元性における解釈学的な^{メタファー}隠喩と象徴。

(2)平和と正義のたたかいにおけるアジアの社会的、経済的現実。

(3)聖書的あるいは聖書的ではない現実によるキリスト教の遺産の継承。

(4)キリスト教徒ではない隣人のなかでのキリストの理解。

(5)多元的な精神性、価値体系、イデオロギー、文化、生活様式への応答。

私は、第4の課題のグループへと参加した。ここでの主題は、キリスト論の多元主義であった。

討論の後に、研究会全体がまとめられた。その方法は、さらに、グループに分かれての討論によった。この結果、「結論」は、ひとつの「報告」となった。あくまでも、報告、討論の多様性を尊重したものとなった。この研究会の概観は、以上のとおりである。経過の詳細、「報告」については、後に出されるであろうドキュメントを参照していただきたい。

II. 実存的な問いかけ——アジアのキリスト論の問いの地平

私が、この研究会で興味を覚えたのは、異なる諸宗教との対話の領域であった。まず、報告に新鮮さを覚えた（前述の4、研究会の構造、(1)証）。一言、断っておくならば、他の報告との比較の結果ではない。私の関心の対象としてである。研究会の過程は、どれも無視することのできないものであった。

報告の内容自体もそうであったが、形式、方法が、注意をひいたのである。形式、方法といっても、論述の構成ではない。主題を説明するために取られた表現の方法である。諸宗教との対話におけるキリスト論の課題について取られた方法は、個人的ともいえる経験から出発したものであった。

(1)マイケル・ロドリゴ、「解放の希望は、人間の非人間性を消滅させる一村のレベルでの対話の貢献」

(2)ウェスレイ・アリラジャ、「アジアにおけるキリスト—ヒンドウ—教徒とキリスト教徒との対話からの視点」

(3)八木誠一、「仏教との出会いと神学的思考への関連性—私の場合」

多少、長くなるが、これらの報告では、どのような経験が語られ、キリスト

論が展開されていたかを紹介しよう。

(1)スリランカのコロombo近郊の農村で、キリスト者の小さなグループの活動が始まった。ロドリゴは、そのメンバーである。仏教徒がほとんどの村で、彼らは、改宗者をつくり出すために村に来たのではないかという懐疑と憎悪をもって迎えられた。彼らの村での活動（教育、医療、文化等）が、村での共同生活で、根をおろし、共感を得られるようになった。村の人々の救済のために、僧と協力すること、教育をとおして、ついには、寺院に招かれ、ブッダの教えについて語るまでになった。対話が、日常的な生活のレベルでなされるようになった。

報告では、村の人々や僧の言葉が、彼らのあいだの共同性と対話とを語っている。キリスト教徒が、仏教徒との共同生活をとおして、特に、現実の苦しみのなかにあって共感することによって、相互理解が始まった。共同体の生活において、キリスト教徒と仏教徒が、実践的に共同性を獲得していった。ここに、対話が可能となる。前提は、宗教の伝統は異なっても、生きている世界、現実のひとつであり、歴史はひとつであることである。アジアの人々の苦難の状況は、ひとつの現実である。イエス、そしてブッダに従う者は、その実践を現実でなす。イエスもブッダも人々のために生きた。イエス・キリストの実践も、ブッダの実践も同じものである。現実に従う者達の実践によって明らかとなる。神の言と法とが、究極的には、同じリアリティーだからである。神の言の受肉が、イエス・キリストであり、法を自覚して顕わしたのが、ゴータマ・ブッダであった。キリスト教も仏教も、同じ究極的リアリティーを示している。イエスの実践とブッダの実践は、同じ現実へと向い、同じ目標へと向う。アジアの苦難の現実であり、人間の非人間性からの解放である。実践をとおして、イエス・キリストとゴータマ・ブッダとが、実践について重なり、究極的なリアリティーによって基礎づけられる。両教の対話と共同性が、可能になる。

(2)アリラジャは、ひとりのヒンドゥー教徒である青年の書簡によって、ヒンドゥー教徒のイエス・キリストとの出会いを示している。彼の前提は、アジアのキリスト論は、あらゆる人々が、自分達の方法でキリストに自由に応答でき

るという確信である。キリスト論に出会うのではなく、イエス・キリストとの出会いが起こる。この書簡では、新約聖書を読んだ青年の出会いが、述べられる。

イエスは、靈的な生命の理想と価値の具体化した人物である。人間のエゴを中心とした精神性から離れている。この点で、イエスは、ヒンドウ教の伝統と深く触れあっており、自然な共通性が感じられる。しかし、キリスト教は、イエスのこの独自性を無視してきた。ヒンドウ教においては、真の靈的な知識は、受け手の側の成長と準備なしには、告げ知らされない。靈的な知識は、内的成長につれ、より新しく深い次元が開かれる。イエスは、この世界の現実には生きていることにおいて、真の靈性が意味することを示している。具体的な靈性である。イエスは、具体的な靈性と靈的な生命が、人間の関係性のなかであらわされる意味を示す。彼の生涯に、行動における靈的な生命の完全な模範を見ることができる。具体的な靈性とは、彼の自発的な無限の同情、無条件の愛、優しさ、謙遜さ、自己犠牲とゆるしである。真実の靈性とは、このような実によってあらわれる。イエスの生きた靈性の強調は、日常の生活と人間の関係性の問題を示し、社会における人間の生の問題性を示唆している。ヒンドウ教は、現代において、この事をイエスから学ばなければならない。

結論として、ヒンドウ教徒は、イエスをグルー（導師）としてとらえる。グルーとは、単なる教師ではなく、人々を人生の目的へと導く真理を告げ知らせるのである。ヒンドウ教徒は、キリスト教からイエス・キリストの生涯と無私な愛、放棄に魅かれ、イエスの生涯をあらゆる人生の模範であるととらえる。それは、生命（宇宙的生命）へと導く生命である。アリラジャによれば、信仰と信仰の表現とは、異なっている。信仰とは、究極的なリアリティーに出会う際の応答である。信仰の表現とは、出会いが表現されることである。アジアのキリスト論は、当時の人々がナザレのイエスに出会ったように、アジアの人々が、イエス・キリストに出会う際に持ち込まれる表現なのである。キリスト論とは、教義ではなく、イエスの生涯と働きに人々が応答する神学的表現である。そして、出会いは、聖書をとおして起こるのであり、聖書は、重要である。

(3)八木は、彼自身のキリスト教徒としての経験から述べる。宗教的実存の問題としてである。キリスト教徒である彼の仏教との出会いと仏教的な経験とを述べる。彼は、その経験をとおして、キリスト教徒でありながら、仏教一禪の心がわかるようになった。その経験とは、直接経験と呼ばれるものである。その経験であらわになったのは、言葉と事の問題であり、エゴの問題であった。言葉の論理による他者や物事や世界の観念化であり、自己の観念化である。キリスト教は、自己自身の観念化からの自由を説き、仏教は、物事と世界の観念化からの自由を説く。この観念化からの自由、すなわち、自己を無にすることが、キリスト教と仏教との接点である。両教は、同じ事柄を違う局面から説いているのであり、宗教的実存の問題として、両教ともに正しいことを八木は、知る。観念化から自由になり、自己自身と世界の成り立ちを自覚するときに、救済が成立する。キリスト教と仏教とは、異なる宗教でありながら、同じ事柄を示している。

キリスト教の問題は、この救済の根拠をイエス・キリストの歴史においてることである。ここに、相対の絶対化が起こる。究極的な根拠ではないものに、根拠をおこうとする。八木は、イエスとキリストとの区別を主張する。イエスが説いた神の支配は、復活のキリストとなった。復活のキリストとは、神の支配の働きである。ここには、イエスとキリストとの連続性がある。滝沢克己のキリスト論、すなわち、神人の第一義の接触と第二義の接触の区別と関係とを受け入れる。第一義の接触は、本来的にあらゆる人々に起こっている事実である。イエスは、その生涯において、第一義の接触を自覚して成就した典型的な人であった。これが、イエス・キリストの意味である。ゴータマ・ブッダもその典型的な人であった。このようにして、キリスト教と仏教とが、同じリアリティーを異なる表現であらわした宗教であることが明らかになる。そのリアリティーとは、神の支配の働きである。イエスとキリストの区別が、両教の真実の対話を可能にする。

これらの立場や経験は、異なっており、独自性を持つ。しかし、広い意味での対話の経験である。次に、対話の課題を検討してみよう。

III. 対話の課題

報告での対話の経験とは、次のようなものであった。

- (1)実践をとおした共同性から、対話の可能性を求める。
 - (2)他の宗教に生きる者が、聖書のイエス・キリストに出会う。
 - (3)キリスト教徒が他の宗教に出会い、さらに、イエス・キリストに出会う。
- キリスト論をめぐるキリスト教と他宗教との対話のケースが示されている。

経験において多様である。

私は、これらの報告に、経験は異なっているが、共通した前提があると考え
る。このことは、重要である。

(a)キリスト教も他宗教も、同じ究極的なリアリティーを異なった表現をもち
いて指示している。

異なる表現とは、表現する宗教の歴史や伝統、性格の相異である。報告では、
究極的なリアリティーの表現として、神の言と法^{ゴッ}(1)、霊的生命(2)、神の
支配の働き(3)とであった。これらは、他宗教との対話を通して、同じ事柄の
異なった表現を見出し、共通の表現を求めていこうとする試みであるだろう。
共通性は、対話の経験から追求されるものである。人間は、異なる宗教の伝統
や歴史のもとにあっても、同じ現実を生きているのであり、その現実は、ひ
とつであるという認識がある。また、他の宗教の真理契機を認めることが、起
こっている。

(b)対話で出会う他者も、同じく主体的な宗教的実存である。

異なる宗教が、同じ主体的な宗教的実存を成り立たせていることを認めること
である。言い換えれば、他者も、本来的には、神に生かされて生きている者で
あることを認めることである。対話においては、本来的に、神の働きに生かさ
れて生きる存在が、出会うことが起こるのである。このことは、異なる宗教が、
同じ究極的なリアリティーを指し示すことを前提とする。この前提に関連した
人間の存在の成り立ちの問題である。

(c)具体的な出会い、対話の経験が、キリスト論の考察の出発点である。

しかし、共通して、経験からより究極的なリアリティーを示そうとする試みが

なされる。経験は、このリアリティーをあらわにしている。このリアリティーは、人間を生かすものであり、人間の生に及んでいる事柄である。人間の具体的な生の局面を支えている。経験が、出発点となっていることには、このような事柄が、考えられるだろう。この経験を、私は、生の具体性と言いかえたい。

これらの共通の前提を踏まえて、他宗教との対話の課題について考察してみよう。

アジアにおいて、キリスト教の他宗教との対話は、以前には、新しい多元的な社会の圧力の結果、起こった課題であった¹⁾。しかし、諸宗教間における対話は、それぞれの宗教が、より新しい次元へと展開していくことを促すものである。宗教間の対話は、基本的に、共同性の実現という性格を持つ²⁾。

対話は、人間の生の基本的な構造が、現実となったものである³⁾。当事者である主体が、開かれた態度でのぞむときに、成り立つのである。対話の出来事とは、相互に影響を及ぼしあい、新しい可能性の方向を志向することである。他者のなかに自己の可能性を見出し、関係性において、自己を実現しようとすることである。他宗教との対話においても同様であり、そこに、真理契機を認めることが、前提である。もし、一方が他方を教化し、改宗させようという意図を持つなら、対話は成り立ちえない。一たとえ、その意図が明らかであろうと、隠されていようと。

このような状況では、宗教が、本来、人間を生かすものであるという事柄が忘れられている。この事柄が忘れられたときに、宗教の向うべきところの人間の生が、無視されることになる。すなわち、宗教の指示する究極的なリアリティーを見出すことは、不可能となる。人間の生の成り立ちは、究極的なリアリティーによっているからである。

他宗教との対話がおこなわれるときに、対話は、教義の再考にまで及ぶであろう。他宗教の真理契機を認め、自己の可能性を他宗教に認めるときに、教義の相対化とともに、新しい理解が生まれる。このような対話が起こるときに、究極的なリアリティーと人間の生の成り立ちとが明らかになる。このことは、生の具体性において起こる。

他宗教との対話の課題とは、宗教の本来志向する人間の本来的な生の成り立

ちと世界の変革を求める共同性へと向かうことである。この対話の可能性が、アジアのキリスト教徒の経験において、現実化しつつあるのである。このことは、アジアのキリスト論の作業に見出される。

IV. アジアにおけるイエス・キリストの姿

この研究会であらわれたアジアのキリスト者の経験から生まれたイエス・キリストの具体的な姿を紹介しよう。

- (1)民衆としてのイエス
- (2)グルーとしてのイエス
- (3)宇宙的なキリスト (Cosmic Christ)
- (4)「直接性」を証示したイエス

以上の姿であった。

(1)民衆のイエスは、韓国の民衆の状況から考えられるイエスの姿である。民衆が、教義によって固定化され、枯渇してしまったキリスト論からイエスを救い出し、よみがえらせる。イエスは、民衆自身であった。イエスは、民衆として苦難を受けたのである。生き生きとしたイエスの物語を語ることは、民衆である。民衆を生かすのは、苦難を受けて死んだイエスなのである。民衆のイエスは、ケーリュグマのキリスト、教義のキリスト論とは異なる、生きたイエスなのである。⁴⁾

(2)グルー (導師)としてのイエスは、先に述べたので、ここでは、触れない。⁵⁾

(3)宇宙的なキリスト (Cosmic Christ) の姿については、私は、残念ながら詳細な説明を聞くことはできなかった。しかし、ヒンドゥー教との対話から考えることができるであろう。ウパニシャッド哲学においては、大宇宙と小宇宙の対応と一致とが説かれている (アートマンとブラフマン)⁶⁾。また、タントラにおいては、コズミック・マンという表現がある。これは、人間の身体の構造と宇宙との対応と一致、人間の悟りの階梯と宇宙との一致を示している。⁷⁾ 宇宙的なキリストは、小宇宙一人間の存在を包み生かし、大宇宙一世界をも包み生かす存在であることを表現したものであろう。⁸⁾

(4)「直接性」を証示したイエスとは、イエスの言葉から、イエスの思想の内

容と彼の生きた生とを示す姿である。イエスの言葉には、善と悪、生と死の対立、すなわち、条理と不条理、意味と無意味の対立を越えて成り立つ人間の生を語るものがある。そこでは、自我の滅ぼされた無心の働きが成り立っている。イエスの言葉は、人間の生の「直接性」を指し示している。ここに、禅との対応があり、禅との対話において、イエスの言葉の証示するところが、明らかとなる⁹⁾。

具体的なイエス・キリストの姿に、アジアのキリスト論の多様性が、あらわれている。具体的なその姿は、アジアのキリスト教徒の生の具体性を組み入れたものである。生の具体性は、多様な現実の経験である。この多様な姿のなかから、共通性を見出してみよう。

イエス・キリストの姿は、宇宙的なキリスト ((3)) を例外として、イエスの姿といわれるべきものであった。イエスの姿と従来の教義としてのキリスト論とが、区別されている。イエスとキリストとの区別がみられ、イエスが着目されている。ここでのイエスは、史的なイエスではない。アジアのキリスト者と人々の経験、社会的、文化的、宗教的な背景からあらわれたイエスなのである。イエス・キリストと出会おうとする人々の出会いにおいて、具体的な姿をあらわすイエスである。

キリスト論の課題は、「イエスとキリスト」であった。史的イエスと信仰のキリストの問題である。キリスト論の課題は、両者の関係が問われることであり、最終的には、平衡のとれた統一¹⁰⁾がなされることである。アジアのキリスト論は、イエスを史的に問うのではなく、アジアのキリスト教徒の実存において問うのである。キリストからイエスを区別しつつも、なにゆえに、イエスがキリストであるのかを問いなおしているのだと考えられる。その場は、生の具体性である。

この問いにおいて、注意されねばならないことを指摘しておこう。生の具体性において問われるキリスト論が、固定化された教義のキリスト論からの解放であることは、理解されよう。しかし、このキリスト論が、経験に固定化され、束縛される危険性をはらんでいはいはしないかという問題である。生の具体性という視点から、究極的なリアリティーと関係したものであろうともである。

いいかえれば、非閉鎖的なキリスト論を志向しながらも、閉鎖的なキリスト論となる可能性が存在するということである。この事について、危惧を抱かざるをえないのである。確かに、具体的な状況にある実存を生かすイエスの姿があらわれるだろう。しかし、この具体性のみとらわれる可能性がある。経験、すなわち、生の具体性からの考察と究極的なリアリティーからの考察、両者が、ともに必要なのである。生の具体性において、究極的なリアリティーの事柄の表現が検討され、究極的なリアリティーの事柄が、生の具体性の批判的な検討を促すであろう。そのときに、イエスとキリストとが区別されながらも、統一されるであろう。そのイエス・キリストは、アジアの人々ばかりでなく、広く、アジアにとどまらず、人間を生かすものとなるであろう。

この研究会が、刺激に満ちたものであったことは、冒頭にも触れたとおりである。この報告には、挙げることができなかったが、活発な討論が、スケジュールのなかで、また、それ以外のところで、おこなわれた。討論をとおしてあらわれたのは、アジア各国からの出席者の気迫とでもいったものであった。アジアのキリスト論をめぐる討論には、アジアのキリスト教の中心的課題を担い、共有しようとする意欲があらわれていた。この意欲の根柢には、アジアのキリスト教徒が、神の働きに応えつつ生かされ、他者とともに生きようと願う願いがあつたであろう。この願いが、生の具体性にあらわれている。この意欲に、そして願いに、触れ、共有することができたことを、この研究会での私の経験であつたと考えている。

注

- 1) C. C. A. Statement, 'The Concern For Dialogue in Asia,' in : Douglas J. Elwood, (ed.,) "What Asian Christians Are Thinking," 1976, pp. 335—338.
- 2) マルティン・ブーバー、植田重雄訳『我と汝、対話』岩波文庫、1985年、183頁。
- 3) 「我と汝」が、他者との関係性の基本であることから、対話は、人間の生の基本的構造である「我と汝」の現実化であると考えられる。
- 4) 安柄茂『解放者イエス』新教出版社、1977年、参照。安柄茂「マルコ福音書におけるイエスと民衆」、キリスト教アジア資料センター編『民衆の神学』教文館1984年、224—260頁。

- 5) ヒンドゥー教徒が、イエス・キリストをどのように理解するかについては、次を参照。M. M. Thomas, "The Acknowledged Christ of the Indian Renaissance," SCM Press, London, 1969.
- 6) 「梵我一如」といわれる。ヒンドゥー教に関しては、菅沼晃『ヒンドゥー教—その現象と思想—』評論社, 1976年を参照。
- 7) 同書, 124頁。
- 8) Cosmic Christ については、以下を参照。S. J. Samartha, 'Unbound Christ : Toward A Christology in India Today,' in : "What Asian Christians Are Thinking," pp. 221—239.
- 9) 八木誠一, 『パウロ・親鸞; イエス・禅』法蔵館, 1983年, 205頁以下。
- 10) 小田垣雅也, 『解釈学的神学』創文社, 1975年, 18頁以下。
- 11) 同書, 参照。Samartha は, キリスト論の問題として, 排他性を挙げている。S. J. Samartha, op. cit.